

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



Data

監督・脚本：彭小蓮 (ポン・シャオレン)

出演：周文倩 (チョウ・ウェンチン)
／呂麗萍 (リュイ・リーピン)
／鄭振瑤 (チェン・チェンヤオ)
／孫海英 (ソン・ハイイン)
／劉家楨 (リュウ・ジャーチェン)

👁️👁️ みどころ

舞台は現代の上海の旧市街地。若い愛人と切れないでいる夫に愛想をつかした妻は離婚を決意し、娘アーシャを連れて祖母のアパートへ「出戻り」。上海の住宅事情の厳しさや女1人で生きていく厳しさは東京以上。したがってそこは、母娘の適切な居場所ではなかった！そこで、娘のために子連れ同士の再婚を決意した母だったが、母娘はそこに安らぎの場所を見つけることができるのだろうか・・・？女性監督の目で、大都会上海における母と娘そして祖母の3代にわたる女性の生き方を淡々と、しかしシリアスに描いた映画だが、上海の住宅事情についてちょっと考えさせられる興味深い映画。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

＜女性監督が描く3代の女性像＞

この映画の原題は『假装没感觉』だが、邦題は『上海家族』。そして、英題は『SHANGHAI WOMEN』。

この映画は、現代の大都会、上海の旧市街地で生きる母娘の姿を中心とし、その祖母も含めた3代の女性の生き方を、女性監督・彭小蓮 (ポン・シャオレン) の目で描いたもの。したがって、どちらかという、邦題よりも英題の方がピッタリする感じ。

＜祖母、母、娘3代の女性たち＞

アーシャの母 (呂麗萍／リュイ・リーピン) は、アーシャの父 (劉家楨／リュウ・ジャーチェン) そして15歳の一人娘アーシャ (周文倩／チョウ・ウェンチン) と3人で暮らしているが、幸せではない。それは、若い愛人とつき合っているアーシャの父が、「別れる」と言いながら、なかなかその縁を切らないから。

今朝、娘のアーシャをバイクに乗せて学校へ送って行った父親の留守中、父親の携帯に、その女性から電話が……。その晩、ついに母親は、父親との離婚を決意。母親とアーシャは、自転車2台に身の回りのものをのせて、アーシャの祖母（鄭振瑤/チェン・チェンヤオ）の住むアパートへ。祖母は自分の娘が、女の方から離婚を言い出して家を飛び出し、「出戻り」となったことを非難するが、仕方なく、アパートに同居させることに……。

<子連れ同士の再婚は？>

しかし、祖母のアパートには母親の弟が住んでいるうえ、弟が許嫁の女性と結婚すれば、そこで同居することに。しかし手狭な祖母のアパートでは、それはとてもムリ。しばらくの間は仕方ないものの、母親はアーシャと共に早くこの祖母のアパートを出ていかなければ……。

そんな中、突然スクリーンは、母親がウェディングドレス姿で、年配のオッサン・李おじさん（孫海英/ソン・ハイイン）と写真を撮っているシーンに。そう、母親は祖母の勧め（？）もあり、アーシャのことを考え、堅実そうな李おじさんと、お互い子連れ同士で再婚し、李おじさんのアパートに住むことになったのだ。特に好きでもない男と、子連れ同士で再婚して、幸せになれる確率は50%……(?)

<やっぱりダメ……？>

李おじさんの狭いアパートの中での4人家族の生活も大変。もっとも、狭いアパートの中での初夜の「営み」は大変(?)だったが、それはアーシャも、そしてアーシャと同じ年齢位の李おじさんの息子・強強（王鏡超/ワン・チンチャオ）もクスクス笑いで済ませることができたと、比較的ハッピーな状況だった。しかし、李おじさんの息子の育て方に、アーシャの母親のやり方が混入すると混乱するのは当然。母親が、強強にブランドのスニーカーを買ってやったことが第1のトラブルの芽に……。そして第2のトラブルは、子供同士。それでなくても狭いアパートの中にアーシャが「侵入」してきたことを快く思っていない強強は、いろいろとアーシャに嫌みを。

そして決定的なのは、ここでも上海の住宅事情。すなわち李おじさんは毎月の生活を切りつめて貯金したうえ、多額の借金をしてこのアパートを購入したため、節約、節約、また節約の、クソ面白くも何ともない人間だった。母親の前の夫であるアーシャの父親は、頭は良く教養はあったが、女にルーズだったのに対し、李おじさんは、誠実だがケチで、毎日テレビドラマばかり見ている頭は悪く教養のない人間。このような李おじさんにとつては、このアパートを自分の力で購入したことが唯一の誇りであり、それを維持していくためには、何としても今までの生活のリズムを崩さず、節約しなければならぬわけだ。

<2度目の離婚の直接原因は水道代から……>

ところが今日、李おじさんが水道代の請求書を見ると、再婚前の水道代の倍以上になっている。これはなぜだ？それは、再婚した妻とその連れ子のアーシャが毎日風呂に入るからだ。それまでの李おじさんと強強の2人暮らしの時は、フロは1週間に1回だったのだ。「そんな細かいことは・・・」と母親がなだめても、李おじさんは納得せず、「今度は水道代はお前が払え」ときた。そうなれば、売り言葉に買い言葉で、母親は「それなら、私たちはテレビを見てないから電気代はあなたが払って・・・」というケンカに。こうなると、もうダメ。再び母親はアーシャを連れて義父の家を飛び出すことに。今度は自転車ではなく、タクシーに乗ったものの、果たしてその行く先は・・・？祖母のアパート以外は、どこにもあるはずがない。母娘ゲンカをしながらも、遂に2人は再び祖母のアパートへ・・・。

<意外だった祖母の対応>

祖母と、母親の弟夫婦たちがマージャンをしているところに、再度「出戻り」した母親とアーシャ。そりゃ祖母も迷惑だが、ちょっと可愛そうなのは、母親の弟の嫁サン。彼女が「母親とアーシャがここに住むのなら、自分は実家に戻らなければ仕方がない」と主張するのも当然。そして彼女は、祖母が彼女の主張を受け入れた形の裁定をしてくれると期待していたはず・・・？しかし祖母の裁定は・・・？そこはやはり、母と娘の情(?)が優先したようだ。すなわち、祖母は再び離婚して住むところのない娘と孫娘アーシャを見放すことはできず、母親とアーシャを再び祖母のアパートに住まわせることに・・・。

<母親と父親は元のサヤに・・・？>

母親とアーシャは祖母のアパートに戻ったものの、そこでずっと生活することができないことはわかっている。そこで母親は、前の夫すなわちアーシャの父親といろいろな交渉(?)。するとここで、意外にも父親は、「若い愛人とは別れたので、お前とやり直そう。再婚の手続をすべいいんだ。」と優しいお言葉・・・。しかし母親は、とてもそんな気持にはなれず、断固拒否。しかし母親が生きていく道はそれしかないのかも・・・？

そして今日、バスに乗って行く母親をアーシャは必死になって自転車で追いかけた。これは、母親が父親との再婚届を役所に持って行くことをアーシャが覚ったから。そしてバスから降りた母親に対してアーシャは「再婚だけはしないで・・・」と訴えた。もちろん母親も、父親と再婚して元のサヤにおさまりたいわけではない。あくまでアーシャのためにその方がいいと割り切ろうと努力していた。

<ハッピーエンドも住宅から・・・？>

映画のラストは、母親がアーシャを連れて、小さなアパートへ案内するところから。見るからに汚いオンボロアパートにアーシャを案内する母親。そして「この部屋どう思う？」とアーシャに尋ねる母親。「建て前で言えば・・・。本音で言えば・・・。」と答えるアー

シャ。

しかし、このアパートは、母親が父親との離婚についての話し合いをまとめて勝ち取ったお金で、母親の名前で購入したアパートだということがわかった時、アーシャはやっと自分たちの住む場所ができたことの幸せに酔いしれ、母親への感謝の気持で一杯となった。

そして次のシーンでは、このオンボロアパートの部屋は、母娘の2人暮らしにふさわしく、テーブルにはおしゃれなテーブルクロスが掛けられ、窓はカーテンや花瓶に飾られて美しく変わっていた。そして母娘の2人は、やっと大都会・上海の旧市街地の中で、2人の住む場所ができたことの幸せをかみしめていた。

これによっていよいよこの母娘は、今後仲良く力を合わせて、無用な言い争いをすることもなく、幸せに生きていくことができるだろう。この映画を観ていると住宅の確保ということが、この母娘の生き方を左右する大切なテーマだということがよくわかる。

<中国の住宅政策のお勉強>

この映画では、中国の大都会、上海の住宅状況が、主人公である母娘が生きていく上で大きなテーマとなっている。そのためパンフレットでは、「中国の住宅事情について」と題する参考資料がついているので、是非その勉強もしてもらいたい。

ここで紹介しているのは、中国では、従来住宅は、職場から従業員に賃貸するもの（福利住宅）だったが、それが、住宅の使用権や所有権を個人が購入する私有住宅（商品住宅）に変わってきたということ。また、1980年代の改革・開放政策を受けて、90年代には「住宅の商品化・社会化の実現」が目標とされ、「個人住宅ローン」の制度もスタートした。

そのため、近時の上海・北京を中心とした大都会での個人による住宅購入の意欲は高く、日本の土地バブルの時代状況のように過熱し、その価格は高騰の一途をたどっている。上海の旧市街地の面積は限られているため、貧富の差の拡大は、低所得層が住宅を手に入れるチャンスを奪っていることはまちがいない。

こんな中国とりわけ上海の住宅事情を理解した上でこの映画を観れば、一層この母娘の苦労とオンボロアパートながら自分の住宅を手に入れたことの喜びを共有(?)できるはずだ。都市問題を勉強している私にとっても、大いに参考となり、考えさせられる、いい映画だった。

2004（平成16）年4月15日記